

生態展示小考

富田 惣七

本誌第18号（46年度）に『4つの情景（生態陳列）』という小文で、製作当時のことを書きました。

今また『30年前の生態陳列作製の苦心談、あるいは思い出話』という題を与えられました。こんど吉崎にできた資料館で、私の直接の仕事は背景画でありましたが、同じようなものを作った折でもありますので、30年前の苦心談というよりは、30年後の反省という事で駄文の一片を。

足羽山博物館の『4つの情景』をひとことで言うならば、ちょっと曲がなかったな、と思っています。

しかし工夫が全然なかったわけではありません。18号に書いたものの中に『東尋坊の海底は、実際の海底の感じをもっていますが、決してそっくりそのまゝではありません。むしろ実際の海底とは全然違ったものなのです。しかしそれが如何にも海底のものであるような、なまなましさを感じさせる。そういうものでなければならぬと、私どもはその事に熱中しました。』とあるように、一知半解ながら、当時としては、まあまあよく工夫したなと思うところもないではありません。

しかし残念ながら、生態陳列などというものには全くの未経験でありましたし、それにもまして、生態陳列とは何だろうかと、いろいろ研究してみるという事もせず、どこかで見たようなものを、楽な気持ちで作ってしまったというのが本当のところでありましたのでありますから、出来上ったものが、今になってみると、平盤で、単純で、一寸した手際だけの仕事になったのも無理ない事かも知れません。

言うまでもなく、自然というようなものを、そう簡単に身近なところへ作り出せるわけがありません。

自然らしいものを人工的に作り出そうとしても、よくそれが、非常に自然らしく工夫が払はれたにしたところで、所詮貧しげな真似事に終るのではないでしょうか。

これはまず覚悟しておかなければならない事だと思います。

もっともらしく飾りたててみようとするほど、それは悪く言えば、単なる『見せ物』にしかなりません。

だから単なる『見せ物』でなく、出来、不出来は別として、自然が私どもに与える感銘を出来るだけ確かに伝えられるものを作るには、単なる『自然らしさ』に取纏ったり、自然の真似だけをするという考え方をまず捨てなければならぬと思います。

これが出発点だと思います。

人為的にそこへ『ある自然の情景』を作るのですから、『作る』という事『1つの造形』であるという事、それをしっかり心しておかなければならぬと思います。

私たちが自然から受けたものを歌にするときに、絵にするときに、その時に何が大切であったかという問題と同じ問題が、そこにあるのだという事を考えねばならないと思います。

例えば、背景画は、単なる前景の延長だというような考え方をやめなければなりません。形としては一応延長のようにになっているけれども、描かれたものは絵画的な（二次面的な）1つの作品であって、決してまことしやかな説明図のようなものであったり、又は演劇の書割のようなものであってはなりません。

つまりそれは、全体の部分ではなくて、場面を構成する一箇の独立した要素でなければなりません。

つまり背景と、設営された前景と、剝製や造花は、それぞれA, B, Cであって、A, A, A'ではないという事です。

それぞれは独立したものであって、それが編集され、組みたてられることで、1つのテーマを出現させる、つまりモンタージュされるという事です。

モンタージュは物理的な結合ではなくて、有機的な合成であります。

以上のことが、今度の仕事で感じられました。それにしても一生懸命やってくれた4人の若者の聡明さと努力によってよい成果を得た事をよろこんでいます。

（福井市立郷土自然科学博物館協力委員）